

# クラス会および近況だより

## 老いて思い出すまま

谷口 順一（昭10）

小生は県の発令前に長崎県長崎中央保健所に勤務していたのであるが、昭和22年10月か、GHQの指示による、全国都道府県の衛生行政に携わる技術者の再教育が、東京の国立公衆衛生院で始められた。第1回目の出席者が3か月の再教育を受けて帰任の前に、第2回目の人選だろうが、どうでも再教育を免れないのであればと手を挙げた処許された。翌昭和23年1月7日、県公衆衛生課森川技術吏員の親切を受けながら、受講のため共に上京し東京都品川区大井南浜川町公衆衛生院大井寮に寄宿。敗戦日本のこととて食料不足の配給票による給食、空腹をなだめすかしながら、東京大井京浜立会川駅で乗車、品川で山手線に乗り換え目黒駅で下車、徒歩で白金台に所在する国立公衆衛生院に通学することとなった。この研修はすべて、GHQの指示を受けなければ時間の変更、研修生の処遇などについても変えられなかった。

細菌学の大家、小島三朗先生の授業の中で「かならず下痢を起こす細菌作用の人体実験をやって見たいのだが、希望者は居ないだろうか？」の話に、小生は元より若手県獣医師ほか数名が手をあげて実験が行われたが、下痢を起こしたものはいなかった。この実験の結果から判断の出来ることは、私達は懸命になって食中毒を起こす細菌を附着させない、繁殖させないように努力し、食品監視を厳重にしなければならぬが、これと同時に各人の普段の健康を維持しておく事が大切であることが判った。即ち、健康的に弱体化した人体にのみ各種の細菌が活性に働くということだ。

東京滞在中の給料は家に届けてもらってるので、

懐中は支給された出張費のみで豊かではなかった。毎日の空腹を紛らわすため、1日の授業後は夕食時までの間、靴下を繕い、かかとの破れを隠しながら、銀座、新宿を覗いたりして過ごしたものだ。銀座ではNHK藤倉アナウンサーのきびきびした街頭録音風景にも出会った。或時は戦前の勤務先東京陸軍軍医学校防疫研究室共に空地になっていた。

研修の3か月も終わろうとする時、GHQが3か月の講義が研修生にどれくらい理解されているか、テストを実施したいと言うのであった。これに対し私等は反対をした。テストそのものには反対はしないが私等は全国各県からの派遣者である為に、私等の成績で各県の序列が問われては各県の名誉に関わるからである。

院長は何いをたてた。GHQも之を了承してテストは中止となった。

やっと3か月の講習を終わり、昭和23年3月末に帰任して数日後、長崎県下の衛生監視員を本庁に集めて伝達講習会が開かれ講師は私だけだった。

昭和23年4月1日、大利茂久医師が県中央保健所長に発令。同8月には、中村誠、田浦正巳、三根常男、今市屋正次、平野元旦等の技術吏員が配置された。

昭和23年10月1日付けで県中央保健所が長崎市に移管されるに際し、所内全員に県市の希望を問われたのだった。

公衆衛生院で全国各県保健所衛生課長短期講習会に出張して留守のため昭和23年10月1日の辞令を3日に受け取った。

# 燃えた3年

松尾 康夫 (昭12)

昭和9年、薬専に合格した。入学式のとき、長崎医科大学の学長から訓辞をいただき、初めて実感した。いよいよ授業が始まり、大変緊張して、熱心に勉強したつもりだった。月日が、またたく間に山や谷を経て、過ぎ去った。その間、特に興味深かったのは、まず高取先生の授業だ。黒板に驚くべき早さで、薬用植物の断面を大きくしかも、緻密に書き、それを説明されたこと。次は植田先生が私達の教室に入り、先生の似顔と構造式が書いてある黒板を、ちらっと見て、平気でその前で講義をされた。私達はあらかじめ、その話を聞いていたので、まさかと思っていたが、それが実現した。次は小澤先生の授業中、「出た」という先生の声が飛んできたこと。など、しっかりと記憶に残っている。さて、折角だから、当時授業を

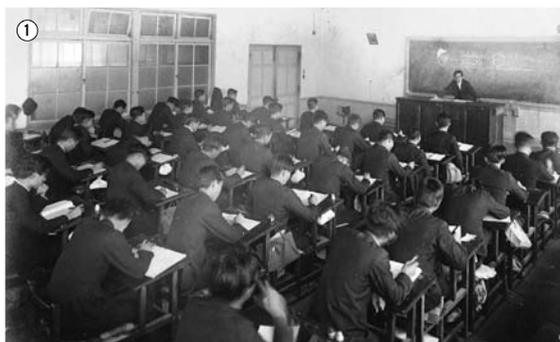
受けた先生および課目を紹介する。敬称は省く。

大倉 東一	無機製造化学
江口虎三郎	生薬学
末次 又二	薬化学
高取 治輔	薬用植物学、商品学
小澤 敏夫	ドイツ語、ラテン語
川上登喜二	裁判化学
植田 高三	有機薬品化学
高嶋 清	有機化学 等

添えてある写真は、①植田先生の授業、②校門（長崎医科大学と共用）、③学校の全景。

まだ書きたいことがあるが、写真で紙面をとるので、これで打ち切らせてもらう。参考になれば幸いである。

同窓生諸兄のご健勝を祈りながら筆をおく。



① 植田先生の授業



② 校門（長崎医科大学と共用）



③ 学校の全景

## 「グビロ」って何？

牟田 邦彦（昭17）

長崎に原爆が投下されて、はや60年になる。年、月の経つのは早いものだと思う。

原爆で母校が壊滅するまでは、坂本町の医大の敷地の中に附属薬学専門部として、グラウンドを隔てた向うに浦上天主堂を望み、グビロヶ丘の麓に校舎がありました。

グビロといえばドイツ語か何か横文字のように聞えますが、これがれっきとした日本語なのです。漢字で書くと「虞美路ヶ丘」となります。即ち虞美人草が咲きみだれる丘の路ということです。

ちなみに虞美人草とは「ヒナゲシ」のことで、あの項羽が愛したなよやかな中国美人のイメージそっくりではありませんか。

原爆で母校を亡くし、点々と校舎を変えて来た

戦後の学生諸君には想像もつかない同窓会支部名のグビロ会ですが戦前の同窓生にとっては、ロマンあふれる懐かしい名前なのです。

また、校章が柏の葉であることは誰でもご存じの事ですが、これは熊本の第五高等学校の校章が柏葉に五高と書いたもので、その五高を取った土台の柏葉のみが校章となったものです。

これは同窓会会則にもあるように、明治の始学制が定められた時、本校が第五高等中学校医学部薬学科とされたことに由来します。

戦後の皆様にも「グビロ会」に長薬同窓会長崎支部としての親しみを感じて戴ければ幸いに思います。

## 薬学専門部在学中の思い出

乃万 正（昭19）

私共昭和19年卒は、大戦下の就学期間短縮の時代に2年半の短い学生生活を送りました。在学中は戦争の最中でありながら、空襲など受けることもなく、多少制約はありましたが平和な普通の生活が送れました。

薬学専門部は、少人数の学校でしたから、先生、生徒、事務職員の方々皆顔なじみで家族的な雰囲気でした。平常日課は、午前教室で受講、午後は各自実習をやっていました。この頃は物資不足で食糧事情も悪かったのですが、実習用の試薬・器械等は充分備蓄されていたようで、殆ど不自由なく実習ができたことを覚えています。またレクリエーションは、枇杷刈り、みかん刈りなど、恒例となっていて、楽しい行事を満喫させてもらいました。

また当時は軍事色の強い時代でしたから、学校教練は必修重視課目となっていたので、毎夏大村

で兵営宿泊訓練にも参加いたしました。昭和18年の春には1年生、2年生合同で、小浜から雲仙まで徒步行進して雲仙に宿泊したことがありますが、一泊の予定が翌日降雨のため一日延期となったので、皆で余興などして遊びました。幸い三日目は晴れて帰路に着きました。その時雲仙から島原湾を見下ろした風景は雄大で美しく、今でも臉に焼きついています。

在学中は、江口先生が専門部主事で学校長の職務の傍ら、就職等の世話もされていて勤労働員中、アフタケアで大阪の製薬会社をお訪ねくださったこともありました。また学級主任は、高取先生でした。先生には平常良き学習指導を受けました。また時にはコンパに御家族とともに御出席されて皆と会食をした楽しい思い出もあります。ただ、私共の卒業せぬままで、ジャカルタの軍政地教授となり応召されましたので、お別れとなりさみし

い思いがいたしました。以上在学中の経緯の一部を思い出すままにお伝えいたしました。

### あとがき

私共は短い学校生活でしたが、幸い戦禍を免れ

て、昭和19年9月に卒業いたしました。いま当時を振り返ってみると本当に幸運に恵まれていたものだとしみじみ感じます。

このようなことを踏まえて思いつくまま回顧録をしたための次第です。

## 長崎地区 26 卒会

中倉 敬昭 (昭26)

過去の人間になり果てたと雖も、集る事が出来るうちは集まろう、とお互いに言い合っている私どもの今回は、去る平成17年4月2日(出)、先ずは例によって長崎の諏訪神社に集まったのです。いつもの事ながら世話方をしてくれる長崎の篠田君、立石君、峰君達には、心の中で深く頭を下げるのみであります。

夕刻、セントヒル長崎での祝会、宴会に揃ったのが、全部で9名(本多、峰、篠田、永江、立石、江頭、田中(天本)、貞方、中倉)です。みんないい男です。勿論、見た目ではありませんので念のため。

今回は、残念ながら欠席の已むなきに至った黒田君を含めて、なんと5名もが祈願祝寿の該当者なのです。該当者の諸氏には、大なる敬意を表してその氏名に殿付けと致しました。例の無責任記でプロフィールを少々許してもらいましょう。

### 1. 傘寿 峰 唯信殿

峰君はもともと高名な僧侶のご子息でしたが、卒後は関西の国立病院に就任された。私が知る学生の頃からの魅力ある性格というか、性情というのか、明朗にして優れた素晴らしいその人格で、厚生省国立病院部の人事担当官に、抜擢任命があって、人事関係を任されたそうです。最終は国立長崎病院、薬剤部長で定年退官、現在は卸薬品に籍を置きながら僧籍を併せ持つ2足のワラジ、更に町内会などの役員を、まだまだやめさせてもらえないと言う、80歳になんなんとして正にバケモノ的存在でありお見事というほかありません。

筆者の私は、諫早小野島3年のとき、峰君のお世話で小野島のお寺、静行寺に彼と共に下宿させ

てもらって精進料理を食し、静まりかえった納骨堂横の部屋に寝起きをしながらかよく遊び、よく遊び、そして学んだ盟友なのであります。

### 2. 喜寿 貞方 典殿

幼少の頃は長崎市で育ったエリート、その後諫早そして佐世保市に永住。聞けば先祖は五島のお殿様の系列で由緒ある家柄、今も五島まで墓参りを欠かさないという、つまり士族であって、世が世であれば、平民の私が対等に話す事が出来る身分ではないのです。

卒後は、佐世保市立市民病院(現佐世保市立総合病院)に就任、その後生化学検査のチーフに抜擢されたものの、当時設立されていた民間の検査センターが、有能な彼をそのままにしておくわけがない。引き抜かれて検査部長から間もなく重責の社長となり、検査業務と会社経営の手腕を発揮、長年多大の貢献をして退任され、現在、相談役の立場で悠々たるものであります。

26年卒の佐世保出身は私一人のみであったのですが、彼が佐世保に永住してくれたので極めて心強く、公私とも何かと世話になっている次第で、親友とは有難いものです。又不思議な因縁か、二人共老いて残った趣味に囲碁があって話題に事欠きません。

### 3. 喜寿 立石正文殿

いつ会っても若々しく元気そうで、喜寿とは、俄に信じ難い。会の会計をはじめ世話方の労を惜しまないそして親切、且つ真摯な人柄で貴重な存在であります。

卒後は、長崎大学附属病院の薬剤部勤務が長い

と聞きますから、その道の経験的话题は豊富と推  
まされませんが、その詳細を知りません。

尚、彼はアルコール類を全く嗜まず、又私ども  
がやっている囲碁もやらないのですが、横で見な  
がら、時折発する言動の中に「能ある鷹は爪を隠  
す」のでは、と推察させられるものがあるのです。

#### 4. 喜寿 江頭文昭殿

中身はともあれ、颯爽としたスタイルは、喜寿  
ほど遠しと感じさせます。学生の頃は名キャッ  
チャーとして野球部でならし、その強肩とリード  
は周囲を沈黙させたといいます。事程左様に抜群  
の運動神経は、今日老いて尚ゴルフの腕前に見る  
可きものがあるらしい。只、ひとつ飲み<sup>ツグイ</sup>そうで全  
く飲まないのがアルコールの類ですが、信じられ  
るのであります。

#### 5. 喜寿 黒田隆次殿

黒チャンこと黒田君のことは、彼が晩年故郷の  
諫早に帰り、この会に加入した平成11年の歓迎会  
記や、彼自身の投稿文などが会報にあるので省略  
ですが、今回体調不良で欠席だったのは誠に残念  
至極です。むしろ彼自身が囲碁の上達を披露でき  
なかったこともあって、さぞ残念がっているだろ  
うと推察しています。後日、貞方君が直接彼に電  
話したそうですが、元気な声であったと聞き、先  
ずは安心しているところです。

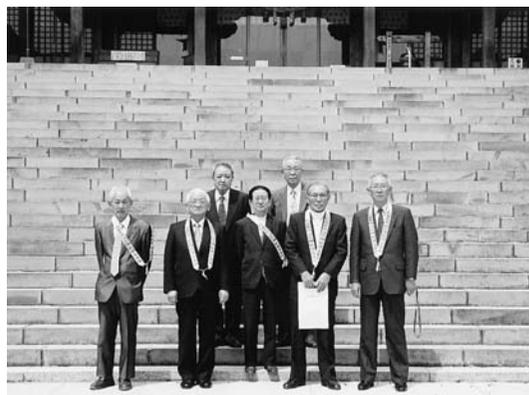
以上の5名が祝寿該当者ですが、実は数年前、  
この会に加入していると聞いていた五島在住の中  
村和正君は今回喜寿の該当者では、と思っていた  
のです。しかし昨年の平成16年11月に死去の知ら  
せ、痛恨の極みであります。彼は五島の福江で大  
きな薬局の経営でもって財をなし、五島の知名氏  
であった由。又私事で恐縮ですが、彼の娘婿であ  
る菅原正典氏(昭51)は、かつて筆者が勤務した  
佐世保共済病院薬剤部に短期間ではあったが勤め  
られ、中村君の娘さん(昭53)との結婚披露宴が  
長崎東急ホテル(当時)で行われた際に招待を賜  
り、当時の病院長(故人)と出席しました。その  
時の媒酌人は、勉強に勉強を重ねて、長大葉の教  
授に上り詰めた昭25卒の古川 淳氏ご夫妻でした。  
菅原君という立派な良き後継者を得たであろう中  
村君の安心した喜びの顔を思い出します。この会  
では一度も会う事がなかったのですが、平成13年  
の長崎日昇館での昭26卒全体同窓会で会いました  
ので、雑談の折「大金持ちになっても墓の中まで  
は持ってゆかれんばい」「いや、そがん金持ちじゃ  
なか…。」なんて言うやりとりをした記憶がありま  
すが、今となっては何とも、にがい様な、切ない  
気持ちになります。

只々冥福を祈るのみであります。

さて、セントヒル長崎では、黒田君の欠席が残  
念でしたが例によって例のとおり、篠田、本多の  
両君を相手に私と貞方君が囲碁の相手をやり、夕  
刻までに揃った9名の全員で祝会です。



セントヒル・長崎にて  
永江 中倉 本多 篠田 田中(天本)  
貞方 峰 江頭 立石



諏訪神社にて  
篠田 中倉  
永江 峰 立石 江頭 貞方

所詮は老人の集まりですから、個人差はあるにしても、刻一刻とガタが増し、老化現象は避けられないのですが、いずれ又、より元気で集まりました

いと願うのみであります。

(平成17年9月1日記)

## 昭和28年卒クラス会

永田 久利 (昭28)

長崎での卒後50周年記念クラス会から2年が経過し、今回は福岡の当番で5月28日、博多の奥座敷とも呼ばれている二日市温泉大観荘で開催しました。幸い天候にも恵まれたクラス会となりました。

今まで、28年卒のクラス会は、一度も1泊して開催することはありませんでしたが、そろそろお互い喜寿を迎える年頃にもなったし、ここらでゆっくり温泉にでも浸り、お互いの健康状態や近況を語り合う機会を持ちたいと1泊2日を企画しましたところ、北は仙台、東京、南は鹿児島という遠隔の地からも参加され、全員で13名の出席となりました。遠方から来ていただきました皆様方には深く感謝する次第であります。

宴会は、入浴後リラックスした気分で始まりましたが、話題が豊富で特に一人ずつの近況報告では、まだ現役で働いている方もいれば、ボランティアとして社会福祉に貢献されている方、また生業の知識を生かした趣味に打ち込んでおられる方など多方面にわたっての活躍には本当に感心させられました。

二次会は部屋に集まり夜が更けるのを忘れるほど会話が弾み、楽しい一夜となりました。

翌日は、お互いの健康と再会を約し帰路につきましたが、一部の方々は太宰府天満宮を始めとする多くの史跡が存在する太宰府市に足をのばし、観光と史跡めぐりを楽しみ解散されました。



後列左より 山口、小川、森、一ノ瀬、吉末 (旧岩佐)、寺田 (旧高取)、永田 (旧田中)  
前列左より 森、松尾、山野内 (旧荒木)、田中、池上、服部

## 個人的近況報告「絆」

服部 俊明 (昭28)

朝の連続テレビ小説「ファイト」を毎朝見ている。厩舎に於ける馬主、調教師、厩務員とその助手（ヒロイン優）が夢を乗せて走る物語である。是は私の生い立ちと共通する所があって彷彿と往時が甦る。

私の小学校時代は国策によって富国強兵の真っ只中。音楽の授業は軍意高揚に繋がるものが多かった。歌詞は「僕は軍人大好きだ 今に大きく成ったなら 勲章付けて 剣さげて お馬に乗って はいどうぞ」等々だ。

家には栗色で精悍な愛馬の雪号が居た。父が陸軍馬術学校出の軍人だったからである。写真でみる父の乗馬姿は背を伸ばし胸を張り勲章付けて、剣下げた雄姿は見るからに威厳に満ちて頼もしい存在だった。そういう姿に憧れていた私は、中学1年の時父の厩舎での仕事を買って出た。それは厩舎の清掃に始まり、飼葉の調製（細かく刻んだ牧草に人参や果物、米糠等を混ぜる）と飼育の他に毛並みを梳きブラッシング等何でもこなした。

馬との信頼関係が出来た頃父は私に乗馬の訓練を始めた。教え方の上手な人で、自分で楽々と乗って見せて、私に乗らせてみて、誉めてやると言う手法だった。不思議に馬は従順だった。こうして馬の心理と癖も教わり、父の指図で馬具の鞍や手綱を装着し、鬣を掴んで乗馬を試みた。馬の背は高い。発進時の鎧裁きと手綱の操作では厳し

い指導を受けた。人馬一体。馬との信頼が不調和の時には馬の暴発や暴走で命にも関わるといふ。速歩、駆走、停止、後退、急速旋回、傾斜地での登り降り、障害飛越、着地の基本を教えてくれた。

また飼葉の調製不良（牧草の裁断不足）で馬が激しい疝痛を起こした事もあった。この病状を逸早く見抜いたのは父だった。早速獣医を呼び、下剤浣腸の後、獣医は肛門から右手を肩まで大腸に突っ込み、消化不良で絡まった糞を取り出した。病状が回復したのは朝方だった。

その後この雪号は軍の命令で召集に掛かり、ある部隊長の軍用馬として日中戦争で活躍したといふ。

戦後は高校、大学とも私設の乗馬倶楽部に入門した。部員は皆馬が好きだった。でも馬に触れた事も無い学生も居たので私は臨時の指導員代行をすることもあった。

以前には走れ走れコートロウ、ハイセイコウ、ハルウララ。今や騎手は武豊と話題は尽きない。振り返れば洋の東西を問わず王室や貴族の軍国と富や権威の象徴だった馬が、現在は娯楽とギャングと平和の象徴である。

馬との付き合いは自然環境の中で人馬一体の絆と信頼が基本である。私の原風景は馬との触れ合いに始まり、今までの社会人生活の支柱と成っているのである。

## 三朋会 長崎・大村をさるく

森田 勉 (昭30)

梅雨入り間近の5月25日～27日、卒後50周年という節目の記念すべき年に、長崎市と大村市において第18回三朋会が実施されました。

25日17時ウエルシティ長崎にてチェックインが進む中、実に50年振りに再会する光景も見られました。全員宴会場に移動し、参加者17名の記念撮

影を終え、代表幹事山本氏の歓迎挨拶と乾杯に続き、最初の会食が始まり旧交を温めながら思い出話を花を咲かせ、第1日目の夜が更けて行きました。

翌朝、ウエルシティ長崎を観光バスで出発、一路日本の窓、文化の窓口出島資料館へと向かい、

約40分の散策後次の予定地グラバー園へとバスは進みます。

途中、長崎港の一部を埋め立て完成した水辺の森公園や開館間もない長崎県立美術館を横目に、その著しい変化に参加者全員が目細めていた事と思います。グラバー園専用駐車場から徒歩で国宝大浦天主堂の下を通り、動く歩道に導かれ、グラバーを始め日本の産業に貢献し、新しい時代への扉を開いた長崎居留地の人々が暮らしたグラバー園へ到着、長崎港や浪漫都市長崎の市街地を一望できた事で、また新しい長崎を発見した事でしょう。

12時中華料理店四海楼にて昼食、長崎港や水辺の森公園、三菱重工長崎造船所等を見廻しながら、本場長崎の中華料理に舌鼓を打ったものです。食事後、中国文化の真髄にせまる珠玉の品々を納めているといわれる孔子廟へ到着。龍の御道石、石人、一角獣、72賢人像等を見学すると異国情緒豊かな思いが漂うものです。

孔子廟を後にし、長崎駅前を通り平和祈念像へ。到着後、祈念像を背に記念撮影。敷地内を散策後、永井隆博士ゆかりの如己堂前を通り原爆資料館へ。祈念像や資料館についての説明は不要であろうと思いますが、核兵器のない世界をめざし、時には平和について考える事が大切である事が改めて思い知らされました。まさに「平和は長崎から」であります。

さて、本日最後の訪問地は長崎大学薬学部学舎。

その内外を見学するのが目的です。まず現在は教育学部の附属幼稚園に様変わりしている旧薬学部前に到着。我々が在学した当時の面影が全く見当たらない中、ただ一つ旧学舎前の蘇鉄がよく成長し微風そよかぜになびきながら我々を手招きして、迎えてくれているような感じを受けたものです。数分後、後髪を引かれる思いで蘇鉄には無言で惜別。いよいよ大学に到着、新学舎は初訪問なので多少の不安をいただきながら学舎内に入れさせていただいた。あちらこちらの部屋を覗いてもしばらくは何の収穫もなく、不安が徐々に募り出す。ちょうどその時、偶然にも2階のエレベーターから降りて来られる前学部長の中島憲一郎教授に会い、まさに地獄に仏の思いがしたものです。(教授とは小島氏、馬詰氏が知友人の間柄)。先生には御多忙中にもかかわらず、各部屋を一つ一つ丁寧に御案内していただき、非常に感謝している所です。ただ、我々の時代と違い学生諸君の服装は勿論、授業の受け方や各部屋の機具装置等が進化していることに驚きを覚えたものです。本当にありがとうございました。

時間は徐々に過ぎ去り、いろいろの思い出を辿りつつウェルシティ長崎に戻り、2日目の夜を迎え、又旧交を温める事が出来ました。

最後の朝、郷野氏、帆士氏、山本氏の車で大村に移動。西日本随一の30万本を誇るといわれるが、まだ三分咲き程度の花菖蒲園や旧教養部跡(現長崎県立大村城南高校)、大村神社又自分の旧下宿跡



等を散策し昼食場所の料亭「てん新」に向かう。

いよいよ今回最後の会食だが、食べきれないほどの御馳走が並び「食べきらんばい」などの声も聞かれました。時間も刻々と過ぎ去り、いよいよ別れの時がせまった頃、代表幹事の山本氏からの参加者に対する感謝の言葉に続き、次回第19回三朋会開催予定の関西の峯 武麿氏から簡単な予定説明があり、別れを惜しみながらもまたの再会を楽しみに飛行機で帰る人、マイカーで帰る人、諫早から特急列車で帰る人、島原鉄道で帰る人等い

ろいろな交通手段で帰路につきました。

第18回三朋会は長崎と大村をこのようにさるきました。

参加者：

山戸	寿	江口	皞	馬詰	久子
川上	万里	小島	弘	近藤	淳子
宮崎	タツ子	副島	英夫	高橋	侃
鎌塚	紀子	酒井	裕子	帆士	辰雄
郷野	美智子	峯	京子	峯	武麿
森田	勉	山本	勲		

## S 31年卒ハマのクラス会

村上 元 (昭31)

平成17年度のクラス会開催は、幕末に開港し、我々にとって全く縁が無いとは言えない近代病院の発症の地である横浜で、ベイブリッジが正面に見渡せ、ランドマークタワーが聳える「みなとみらい」を選んだ。23名という多くの参加者を得て、初日の4月24日は、横浜グランドインターコンチネンタルホテル内の料亭「なだ万」で宴会、大いに盛り上がった。

ところで、横浜市中区には近代的な「みなとみらい」とは対照的な古都を髣髴とさせる三溪園がある。この三溪園の広大な園内は、鎌倉や京都など各地から移築された十指に余る貴重な古い時代の建築物が春緑の中に点在していて、古都の風情と静かな美しさを満喫できる場所である。二日目

は、この園内に所を移して散策し、うららかな春の一時を過ごした後、新横浜駅で一部の帰宅組を見送った。さらに時間的余裕のある残り16名は、横浜から東名御殿場を經由し、富士の高嶺を遠望しながら西伊豆へと足をのばし、駿河湾を眼下に望む宇久須温泉で二日目のクラス会を楽しんだ。

来年は大学卒業後、半世紀という記念すべき年？に当たりクラス会開催場所は長崎と決定している。年の経過と共に、クラス会でお会い出来なくなる方が出てくるのには寂しさを禁じえない。健康寿命という言葉があるが、老化に抗して来年のクラス会、さらにその先のクラス会の参加に向けて健康寿命の維持に努め、再会を期待したい。

関東在住世話人一同



「みなとみらい」にて



三溪園にて